

## 【沖縄】「長年の夢叶う」30代医師夫婦が語る離島診療への思いと現状-有路登志紀・春香・久高診療所医師に聞く◆Vol.1

2022年10月7日（金）配信 m3.com地域版

沖縄本島南東から東に5.4キロメートル、南城市知念岬から高速船で約15分の場所にある久高島。人口約200人のこの離島を医療面でバックアップするのが30代の医師夫婦、久高診療所の有路登志紀氏と春香氏だ。両氏は子どものころに地域医療に関心を抱き、離島診療に携わることは「念願だった」（春香氏）という。久高島での診療の概要と2人が地域医療に関心を持った経緯を聞いた。（2022年9月19日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら

——久高島（面積約1.4平方キロメートル）には200人ほどが住んでいると聞きます。一般的な地方の診療所と同様、患者は高齢の人が多いのでしょうか。まずは患者層とスタッフ体制についてお聞かせください。

**登志紀** 久高島には60代以上が多く、診療所に訪れる患者さんも高齢の方が中心です。ただ、久高島は一家族当たりの子どもの数が4人ほどと比較的多いため、風邪の症状などを訴えるお子さんも受診されます。来院数は日によってばらつきがありますが、予約の患者さんが多い日で8人ほど、少ない日で1、2人。1日の来院のうちおよそ3分の2が予約、3分の1が予約外という割合です。

診察終了時に次回の予約を取られていく方、つまり定期受診されている高齢の方は生活習慣病やCOPD、骨粗しょう症、認知症など一般的なプライマリケアを要する人が多く、予約外の患者さんの主訴は風邪や頭痛、ケガ、体の不調が多いですね。今は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の方を診療することもあります。

スタッフは私と妻、看護師と事務の4人です。私たちがこちらで診療するようになったのは2021年4月で、当初は妻が所長を務めていました。その後、妻が大学院生として学ぶようになったため2022年4月に私が所長を代わり、中心となって診療しています。私が有休を取るときなどは妻が診療してくれます。



有路登志紀氏と春香氏（本人提供）

——夫婦で協力しながら診療しているんですね。離島だと薬の処方はどうしているのですか。島唯一の医療機関なので在宅医療も必要になってきそうです。

**登志紀** 薬は院内処方です。沖縄県立の病院は現在、計16の離島診療所を運営しており、当院の母体は県南部の基幹病院である南部医療センター・子ども医療センター（南風原町）です。採算性の点から離島診療所のうち薬局があるのは人口が1000人以上いる南大東島だけであり、当院では医師が処方したものを看護師が調剤しています。

在宅医療は病状などによって診療所に来られない方に提供しており、訪問診療と往診を行っています。今は1人を定期訪問していますが、少し前は老衰の高齢患者さんに看取りも見据えて医療を行っていました。大体、1人か2人は在宅医療の必要がある状況です。

——**春香先生は2016年に順天堂大学を卒業後、沖縄県立中部病院で初期研修を受けたと聞きます。この選択は離島診療に携わることを視野に入れたものだったのでしょうか。**

**春香** そうですね。私は学生のころから医師として離島で活動してみたいと考えていたので、中部病院での初期研修はそれを踏まえた選択でした。2年間の初期研修を終えた後は学生のころから別に興味があった海外ボランティアに携わり、その後、事情があっていったんは地元である東京に戻ってクリニックに勤めました。そして、2021年4月に念願の離島診療に携わることができました。夫とは東京にいたころに出会って2020年に結婚し、ほどなくして妊娠していることが分かりました。

——**曲折を経ての離島診療開始だったと。なぜ、医師として離島で活動してみたいと思っていたのでしょうか。**

**春香** 子どものころから沖縄の、特に離島が好きだったためです。私の母親は旅行が好きで、小さなころから国内のいろいろな場所に連れて行ってもらっていました。そんななかで特に印象に残ったのが、渡嘉敷島や阿嘉島などの沖縄の離島でした。どことなく風土が肌に合う感覚があり、中でも穏やかな気候や独特な音楽が気に入りました。今でも5歳のころに渡嘉敷島を初めて訪れたときのこと、島の晴れやかな風景を覚えています。

その一方で、私は子どものころから人が足りていないところで働きたい、その地域の人たちの役に立つ仕事がしたいと思っていました。父が医師だったこともあり、職業としては医師が浮かびやすかったのだと思います。やがて、医師が足りない地域で、特に離島で活動したいと思うようになりました。



青い空と海が際立つ久高島（本人提供）

——**登志紀先生も学生のころから地域医療に興味があったようですね。医師になった後、別の取材に「地域医療をバックアップしたい」と答えています。**

**登志紀** 私も妻と同じように、子どものころから医師を志していました。母が養護教諭を務めていたこともあり、人の生死に関心がありました。当時の私にとっての医師のイメージは、いわゆる「町医者」でした。

私は神奈川県厚木市の大きな団地に育ったのですが、その一角に小さな診療所があったのです。その団地は駅から離れており、近くに医療機関はあまりありませんでした。団地住まいの人は何かあったとき、まずはその診療所の先生に相談しており、私もお腹が痛くなったときなどに受診していました。先生は患者のつらさに寄り添ってくれるような人で、子どもの私にも優しく声をかけてくれたことを覚えています。



久高診療所の外観（本人提供）

#### ◆有路 登志紀（ありじ・としのり）氏

2011年群馬大学医学部卒。2013年に同大病態総合外科学講座に入局し、さいたま赤十字病院や原町赤十字病院などに勤務。2017年に森山記念病院消化器外科に移り、2021年からは沖縄県の離島・久高島の久高診療所に勤める。

#### ◆有路 春香（ありじ・はるか）氏

2016年順天堂大学医学部卒。沖縄県立中部病院で初期研修を受けた後、ヨルダンなどで海外ボランティアに従事。東京都のクリニック勤務を経て2021年から久高診療所に勤める。現在は同大学院グローバルヘルスリサーチに在籍し、国際保健について学ぶ。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

